した．**方法**：① 脳血管写で閉塞を確認後，Target 社製 Tracker 18 Catheter を用い，直接血栓に tPA 10 Mega 単位（30例）または UK 24万単位（12例）を20分間で注入した．再開通が得られない場合には上記を3回まで繰り返した．② tPA（UK）投与前後および2日後に採血を行い，以下の検査を施行した：赤血球数（RBC），血小板数（PLT），Fibrinogen（Fbg），FDP，D-dimer，Antithrombin Ⅲ（AT），Plasminogen（PLG），α_2-antiplasmin（AP），Plasmin-α_2-antiplasmin 複合体（PIC），tPA 抗原量．**結果**：① tPA は，平均 23 Mega 単位，UK は，平均68万単位投与されたが，臨床的に出血傾向は認められなかった．再開通率はそれぞれ，77％，75％で，有意差はなく，また再開通・非再開通群間には，凝血学的に有意な差は認めなかった．② UK は tPA に比し，投与後に有意に，より強く全身の線溶を亢進（PLG，AP の減少および PIC，tPA の著増）させたが，2日後には投与前に復した．③ 血栓溶解のみならず Fbg 分解を意味する FDP は，tPA，UK 両群で，投与後に有意差なく増加したが，血栓溶解のみを意味する D-dimer は，tPA 群で有意に，より著しく増加した．また Fbg は，UK 群で有意に著減した．④ RBC，PLT，AT は，両群ともに投与後には有意な変化は認めなかった．**結論**：tPA と UK の間に再開通率において有意な差は認めなかったが，UK は全身の線溶亢進をより強く惹起し，血栓溶解より，Fbg 分解が優位となった．全身の凝固線溶系に対する影響が少ない点で，tPA が優れていると思われた．

2）心筋梗塞（AMI）に対する t-PA の末梢投与の効果

堀　知行・矢沢　良光
花野　政晴・鈴木　善光
丸山　弘樹・小沢　吉郎（県立六日町病院内科）
伊藤　正一

H 3年11月1日からH 4年3月31日までに心筋梗塞としてで治療された14症例のうち発症時間6時間以内，心電図上2誘導以上での ST 上昇，胸痛を伴っているもので絶対的な禁忌となる基礎疾患を有さい8例に対して t-PA を使用したのでその結果を報告する．

t-PA を使用した症例は，入院時の心電図より下壁4例，前壁2例，下側壁2例であり，過去に心筋梗塞の既往をもつもの2例，狭心症の既往をもつもの1例，年齢は47～77（平均63）歳で男性7例，女性1例であった．そのうち臨床的（胸痛の速やかな軽快，心電図上急速な ST 上昇の正常化，不整脈の出現，ピーク CK 値の早期発症）に再疎通したと思われる症例は4例（うち2例は再梗塞），不明が2例であり，現在までに冠動脈造影を施行された5例のうち再疎通したと思われる症例は2例（再梗塞した1例は除く）であった．

Ⅲ．特 別 講 演

急性心筋梗塞の発症機序と治療
—特に血栓溶解療法を中心として—

熊本大学医学部循環器内科教授
泰 江 弘 文 先生

第24回新潟血栓止血研究会

日 時　平成4年10月24日（土）
午後4時～7時
場 所　新潟東映ホテル
1F　白鳥の間

Ⅰ．一 般 講 演

1）経皮的 Greenfield 下大静脈フィルターを挿入した下肢静脈血栓・肺塞栓症の1例

中村　厚夫・岡田　義信（県立がんセンター新潟病院内科）
堀川　紘三

2）腹部大動脈瘤に伴う DIC の2例

小山　覚（済生会新潟第二病院血液化療科）
船崎　俊一（同　循環器科）
本間　智子（同　呼吸器科）
本間　明（同　消化器科）
張替　涼子・関　伶子（同　眼科）

高齢者腹部大動脈瘤に伴う DIC の2例を経験した．第1例は84歳，男性．眼痛が主訴，右眼球結膜と硝子体出血で発症した．第2例は83歳，女性．右肩腫脹と疼痛を主訴とし，皮下血腫・筋肉内血腫で発症し FOY でコントロール後に血腫除去術を施行した．この例は6カ月前にも右大腿部血腫により，血腫除去術を行っていた．2例とも出血傾向は比較的軽く，FOY の投与で DIC のコントロールは容易と思われた．しかし，第1例は